

学びのユニバーサルデザインの視点を 取り入れた授業実践

学籍番号 159977
氏名 津村 桃子
主指導教員 野田 航

1. 序論

昨今の教育場面での学習者の多様化に伴い、通常の学級において、特別な支援を要する児童も共に学ぶ、インクルーシブ教育の実施が重要視されている。通常学級における学習において、特別な支援を要する児童のように大きな困り感を持っている児童はもちろん、その他にも授業内の様々な場面で困り感を持つ児童が多くいる。ゆえに学校は、全ての子どもを包み込む教育システムの構築を目指すべきである。そして教師は、児童の多様性を受け止め、個人のニーズに合わせた授業実践を行うことが求められる。このように、個人のニーズに対応した学びを提供するための一つの視点として、本研究では「学びのユニバーサルデザイン (Universal Design for Learning ; 以下、UDL)」を取り上げる。UDLとは、Center for Applied Special Technology (以下、CAST) が提唱している、通常の学級で学ぶすべての子どもたちがアクセスできるように柔軟なカリキュラムを構成したり、授業などをユニバーサルデザインの視点で見直したりするための方法論である。本実践研究では、この視点を授業実践に取り入れることの効果を明らかにすることを目的とする。

2. 実習校の環境と取り組み

本研究を実施したX市立Y小学校は、授業のUDに力を注いでいる。対象校は落ち着いた児童が多く、整った環境であるため、授業のUD化がパターン化にならないよう、子どもの学びの深化を進める教育をしていくべきであるという報告を、参加した特別支援委員会の中で聞いた。そのため、カリキュラムを柔軟にするUDLの実施が有効であると考え、実践研究に取り組んだ。また、対象学級である第5学年a組で授業観察を行ったところ、学習指導において授業のユニバーサルデザイン(以下、授業のUD)の視点を取り入れられ、様々な工夫がされていた。広汎性発達障害の診断を受けている児童、ADHDの傾向があるとされた児童がそれぞれ1名ずつ在籍していたが、この2名の児童に対して他の児童は障害とは捉えず、個性として受け止めていた。

3. 社会科におけるUDLの視点をを用いた授業実践

本実践では、CASTの教師用チェックリストに基づいたカリキュラムの作成、それに基づく授業の実践、主指導教員とのリフレクションミーティングでのふりかえり、そこで得た学びを活かしてカリキュラムに修正を加えながら、授業実践を行うことを計画した。授業実践は、第5学年社会科の「自動車工業のさかんな地域」を実施し、ジグソー学習やマインドマップなど、多様な指導方法を試すことができた。そして、学級担任からのアンケート評価では、全ての授業において「児童は主体的に取り組んでいた」との評価を受けた(4件法で「4」が62.5%、「3」が37.5%)。しかし、知識面の定着や評価面の弱さ、児童理解の甘さなどが課題として残った。

4. 理科におけるUDLの視点を用いた授業実践

本実践では、アンケート・単元テストの実施・結果の統計的解析、児童の作成したポートフォリオについての評価、担任の先生による授業評価を行った。授業実践は、第6学年理科の「植物のつくりとはたらき」で多くの実験を行い、特にワークシートについて工夫した。事前と事後に実施した単元テストでは、「知識・理解」「技能」「思考・表現」の全ての領域で平均点が向上した。児童の意欲を測るアンケートでは、項目6「理科の観察で、毎日やらなければならないものは、めんどろうだなどと思う」で得点が減少した。そして、8枚のワークシートについて3段階で評価したところ、最も低いものでクラス平均が2.12点、最も高いものではクラス平均が2.97点となり、全てのワークシートでクラス平均が基準の2点を超える結果となった。しかし、ワークシートによっては、授業で学んだことを正しく書けていない児童がいるものもあり、イラスト等を活用することによって、この課題を解消していく必要があるとわかった。また、児童用アンケートの改善を図ることも、課題として浮かび上がった。

5. 国語科におけるUDLの視点を用いた授業実践

本実践では、カリキュラム作成時に授業のUDや堺版授業スタンダードの考えを取り入れた。この実践の評価方法として、アンケートの実施、結果の統計処理、児童の作成した鑑賞文についての評価、学級担任による授業評価、事後の単元テストを実施した。授業実践は、第6学年国語科の「『鳥獣戯画』を読む」「この絵、わたしはこう見る」を行った。パフォーマンス課題として鑑賞文を書くことを設定し、毎時間鑑賞文のポイントについてふりかえりを行い、さらにグループワーク等を通して意欲を高め、知識を定着させた。児童の意欲と授業理解を測るアンケートにおいて、項目②「文章を書くことは楽しい」、項目③「国語の授業が理解できている」、項目⑥「国語の授業中、自分の良さを発揮できている」の3つの項目で得点が向上した。また事後の単元テストについては、平均点が91.79点であったことから、本単元についての基礎知識が身につけていることが確認できた。しかし、学級担任による授業評価の中で、項目8「指導の順番などを確立し、理解するために必要な選択肢を与えることができていましたか。」のみ、4件法のアンケート評価で平均が2.78点と3点台に乗らない結果となった。学校環境適応感尺度のASSESS等を用いて児童の特性を把握し、行動や発言を予測し、また予測したものを引き出せるような授業展開を常に考えることが、今後の課題である。

6. 考察

本研究では「UDLの視点を学習指導に取り入れることの効果を明らかにすること」を目的として、授業実践を行った。各授業実践の中でアンケートや単元テスト、パフォーマンス課題を実施し、評価を行ったところ、改善点も多く残されているものの、UDLの視点を授業実践に取り入れることの有効性を示すことができた。そして、授業のUDとUDLの融合は、難しい側面もあるが、達成できればさらに子どもたちにとって学びやすく理解しやすい授業を生み出すことができ、「学びのエキスパート」を育むことができると考えられる。対して、UDLを導入・提案するにあたっての課題も見えた。その一つに、具体的な指導方法が定まっていないことが挙げられる。まずはPDCAサイクルの一部にUDLの視点を取り入れることから始めることで、カリキュラム側に児童が困り感を覚える理由を見つけることができ、授業改善の一助となる。今後は、「バリア（困り感）の原因は子どもではなくカリキュラム側にある」というUDLの根幹となる考え方について広め、多くの授業実践をもとにUDLを具体化し、多くの教師が実践しやすいように、積極的な成果報告をすることが必要である。